

実践ガイド 3

校務分掌と連動し、実践を 学校全体でシステム化

実践報告：山田賢治



I 学校全体で取り組むポジティブ行動支援

データに基づく実践を学校全体でシステム化

近年、ポジティブ行動支援は、個々の教員の取り組みの枠を超えて学校全体で取り組まれるようになってきています。ポジティブ行動支援は、教師の勘や慣習に頼るのではなく、データに基づく実践を学校全体でシステム化することによって、効果が高まります。

まず、中学校全体で取り組むポジティブ行動支援の実践を紹介したいと思います。この実践は、地域の数校で持ち回る研究指定を受けて取り組みました。^[1]それによって教職員の合意形成もスムーズにでき、結果的にさまざまな効果が生まれるものとなりました。^[2]

前述のようにポジティブ行動支援は、「学校全体でシステム化する」ことでより効力を発揮します。よって個々の教員がバラバラではなく、足並みを揃えて実践するための校内体制づくりや研修を行いました。ここでは、筆者（山田）が以前勤務した里庄中学校で行った学校全体で取り組むポジティブ行動支援の導入から実践、検証までの流れを紹介します。

[1] 研究指定を契機に始める：

学校規模のポジティブ行動支援の開始は、何かのきっかけがなければなかなか難しいが、研究指定はその契機になりやすいかもしれない。例えば、いじめ予防、不登校対応、インクルーシブ教育、生徒指導、教育相談、学びの多様化などといった切り口から、ポジティブ行動支援の導入を図るのも有効だろう。

[2] 丁寧な合意形成：

一部の教員や管理職だけで導入を進めるのではなく、職員会議等で学校の課題をデータで示し、必要性や想定される効果とコスト（労力）を全職員に説明して、合意形成しておくことが重要。

資料2-13 「里庄中学校の望ましい行動表」

場面 \ 価値	明	強	正	美
あいさつ	明るくあいさつ (笑顔で)	気づいたら先に あいさつ (大きな声で)	正しい言葉で あいさつ (相手を見て)	誰にでも あいさつ (同級生・先輩・後輩・ 家族・地域・来校者)
美化活動	終わりの あいさつができる (大きな声で)	活動場所に すばやく集合できる (時間までに)	自分の分担を きちんと果たせる (丁寧にすみずみまで)	自分の分担以外 にも取り組める (汚れを見つけて)
2分前行動	授業の準備が できている (必要なものだけ出す)	予習をしている (教科書を開いている)	2分前に 着席ができる (正しい姿勢で)	静かに待つよう 呼びかけができる (自分も友達も)

✿✿ まず目標となる行動表を設定する

研究指定を受けることが事前にわかっていた里庄中学校では、2年間の研究期間が始まる前年度の3学期から研修をスタートさせました。

新年度からスムーズにポジティブ行動支援をスタートさせるべく、松山康成先生に外部コンサルタントになっていただき、^[3]ポジティブ行動支援の基本理念を学びながら、目標となる「望ましい行動表」を作成しました(資料2-13)。

もともと里庄中学校の目指す理念として「明・強・正・美」という言葉があったため、^[4]「その言葉は、具体的に何を達成できた状態なのか」を教員全員で討議し、具体例を行動表としてまとめました。事前の研修や、目標の共有があったからこそ、^[5]新年度からすぐに実践を始めることができました。

✿✿ 学校規模で動くための校内体制づくり

そして新年度に入り、すぐに校内体制づくりを行いました(資料2-14)。校務分掌と連動させることで業務の負荷に配慮^[6]し、校務分掌の長にそれぞれ「生徒会」「学級活動」「授業」の研究を任せることで、校内のあらゆる場面でのポジティブ行動支援の実践が可能となりました。試しに1つ取り入れてみるのではなく、学校規模で結果につながるように校務分掌で分担してポジティブ行動支援を導入することで、1人の校内コーディネーター(研究主任)^[7]だけでは実現しえない大規模な実践ができました。また、各校務分掌の長に実践のマネジメントを委ね

[3] コンサルタントとの連絡事項：

この時の山田先生とコンサルタントとの連絡は、週に1、2度程度メールで行った。連絡事項は、取り組みの標的行動、ABCの確認、記録の共有、記録に基づくコンサルタントからのフィードバックの校内共有など、細目にわたって行われた。

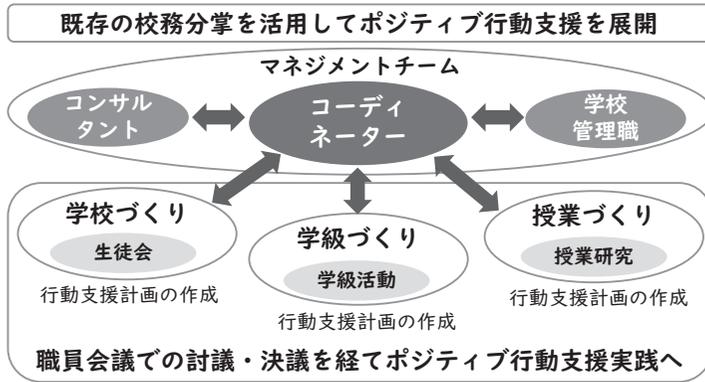
[4] 学校文化を尊重する：

先日、北海道旭川市で偶然お会いした里庄中学校を卒業した先生に「明・強・正・美、ですね」と言うと、「なんで知っているんですか!」と即座に反応された。このように学校に根づいた校訓や目標は尊い。この実践ではその理念を活かし、そして学校教職員全体で大事にしたい3つの行動に焦点を当てて行動表が作成された。一般的な行動表とは異なるが、先生方が考えられたこと、そしてその学校で根づいている文化を尊重しながら実践を進めることも大切である。

[5] はじめ大変、あとは楽：

里庄中学校での研修は、実

資料2-14 校務分掌を基盤としたポジティブ行動支援モデル



ることで、校内コーディネーターはより学校全体に視野を広げて実践の進捗やデータ収集の状況などをマネジメントしたり、管理職・外部コンサルタントとの調整に専念したりできたことが、成功の理由の1つだったといえます。^{[8][9]}

また、校内コーディネーターが中心となって、これまで校務分掌に位置づけられていた仕事を統合・廃止する働き方改革にも並行して取り組み、ポジティブ行動支援をはじめとした新たな取り組みに対する負荷を減らし、意図的に業務量の適正化を推し進めました。それによって、職員がポジティブ行動支援に取り組みやすくなりました。

✿ ABCフレームを理解する

継続的に校内研修を行う体制も整えました。「ABCフレーム」や「3層支援モデル」といった基本理念に基づかずに称賛ツールなどのポジティブ行動支援の実践を行っても、十分な効果は得られないでしょう。できる限り外部コンサルタントの松山先生を招き、月1回は校内研修を行うよう年間計画に組み込みました。

例えば、教師の生徒への支援をABCフレーム（三項随伴性）に当てはめて考えてみると、生徒の行動（B：Behavior）に対して、先行事象（A：Antecedent）において教師がどういった働きかけをしたか、その結果事象（C：Consequences）において教師がどういったフィードバックを与えたかを整理することができます（資料2-15）。

このABCフレームは、ポジティブ行動支援のみならず世の

施開始年には計5回（3、6、8、10、11月）行った。行動表の作成は3月に行っており、新年度にかけて校内組織体制を整えられた。このように見ると負担感があるかもしれないが、最初に学校・教職員として何を大切にしたいかを検討し、それを実行できる組織をつくっておくことで、その後はさまざまな成果が生まれる学校態勢が構築できるのである。

[6] 既存の学校システムを活かす：

学校全体、全教職員で取り組むためには、ポジティブ行動支援のために業務を付加するのではなく、なるべく既存の業務や校務分掌などを活かし、取り組みへの参画の心理的なハードルを下げるのが重要。

[7] 校内コーディネーターの立場：

校内コーディネーターの立場は、生徒（生活）指導主事、教育相談担当、研究主任などが考えられる。校内でリーダー的な立場の方を中心にマネジメントチームを結成することが、スムーズな実践のためには望ましい。

[8] 校内コーディネーターの役割：

学校全体、全教職員で取り組むために、校内コーディネーターの役割としては主に次の6点が重要となる。

①取り組みの構想をサポートし、②子どもにとっても社会的にも望ましい取り組みであるか、マネジメントチームで検討する。取り組み中は、③教員のフィード